

自然科学のとびら

Newsletter of the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History

Vol. 29, No. 3 神奈川県立生命の星・地球博物館 Sept. 2023



江の島に現れたホッケ

写真(KPM-NR 241006A):

ホッケ *Pleurogrammus azonus* Jordan
& Metz, 1913, 新江ノ島水族館水槽
内, 崎山直夫撮影

さきやま ただお
崎山 直夫 (新江ノ島水族館 館長)

せのう ひろし
瀬能 宏 (学芸員)

2023年2月13日、北方系の魚類として知られるホッケ(スズキ目アイナメ科)が江の島の定置網で漁獲されました。相模湾には温帯域の魚類が多く見られる他、近年では海水温の上昇傾向を反映して熱帯・亜熱帯生物の記録が増えつつあります。一方、冬の寒い時期には北方系の生物が出現することがあります。本種もその一つで、本来は東北地方以北に多い魚類です。

相模湾では1962年以降、これまでに少なくとも16例のホッケの出現が記録されています。昨冬は下田の爪木崎にキタ

オットセイ(2022/12/27)、東京湾の羽田空港近くでトド(2023/1/15)が出現したことから、親潮からの冷たい水が相模湾に影響を及ぼしていた時期があったのかもしれない。

食卓では開き干しなどでなじみのあるホッケですが、近年は漁獲量が激減し、食卓にのぼるサイズが小型化して値段も高騰しているようです。今回のホッケは他の魚に混ざって漁獲されたにもかかわらずとても状態が良く、「相模湾産のホッケ」として新江ノ島水族館で展示することができました。

神奈川県での牧野富太郎

たなか のりひさ

田中 徳久(館長)

はじめに

2023年度前期の連続テレビ小説「らんまん」で、主人公のモデルとされている^{まきのとみたろう}牧野富太郎は、日本の植物学の父とも呼ばれます。牧野は高知県に生まれ、東京大学を活動拠点の一つとしましたが、神奈川県にも深い^{ゆかり}所縁があります。ここでは、神奈川県での牧野の活動と牧野が採集した標本を紹介します。

牧野富太郎と横浜植物会

神奈川県には、日本最古の植物愛好会である横浜植物会があります。会は、1909(明治42)年、牧野を講師に迎え、横浜市中区弁天通にあった丸善薬店に誕生しました。後に『神奈川県植物目録』(1933)^{へんさん まつのじゅうたろう}を編纂した松野重太郎ら5名が発起人でした。牧野は会の指導者として、例会(現在は観察会ですが当時は採集会)に参加し、横浜市内はもとより、神奈川県内各地、富士山方面にも足を延ばしており、標本や写真が残されています。初期の会員には、清水藤太郎や久内清孝、^{しみずとうたろう ひさうちきよたか}たてわきみさお ^{たけだひさよし} ^{いとうはつたろう} ^{そうそう}館脇操、武田久吉、伊東初太郎、錚々たるメンバーが名を連ねていました(図1)。また、ヨコハマダケ(図2)やトウゴクミツバツツジ(図3)、イワシャジン(図4)など、会員が採集した標本をもとに牧野が命名した植物や、会員が発見に関わった植物ほか、会員に献名された植物が多数あります。

横浜植物会は、その後も活動を続け、2009年には100周年を迎え、100周年



図2. ヨコハマダケの石碑。ヨコハマダケは横浜植物会の発起人のひとりである松野重太郎が発見し、牧野が1918年に記載した。碑は旧松野重太郎邸に建立されている。

記念誌『横浜植物会の歴史』を刊行しました。現在でも誕生当時と同様、月1回程度の例会を開催し、牧野の遺志を汲み、会員への植物知識の普及に努めています。また、『神奈川県植物誌1988・2001・2018』のための調査に協力し、2003年には『横浜の植物』を刊行しました。これらは標本を元にした分布図を掲載した学術的な成果で、牧野の標本に対する熱意を引き継いだ活動だと言えます。牧野の学術と普及教育に力を注いだ情熱が、会の活動にも連綿と引き継がれています。

牧野が残した植物標本

牧野は、横浜植物会だけではなく、日本各地で、それぞれの地方の植物愛好家を指導するとともに、自らも植物標本を採集しました。また、併せて指導した地方の愛好家から植物標本の同定(植物の名前を明らかにすること)を依頼されました。その生涯に収集した植物標本は40万点を超えると言われ、多くは東京都立大学の牧野標本館に収蔵されています。その中には、牧野が学名をつけ、新種として記載した植物の基準標本のほか、後に別の研究者により、別の標本に基づき新種として記載された植物も含まれます。



図1. 横浜植物会例会。大正6年1月21日 神奈川県立第一中学校 現・県立希望ヶ丘高等学校(伊東初太郎の孫である三谷 創提供)。

神奈川県に所縁のある牧野標本

神奈川県内で採集された標本に基づいて牧野が新種として記載した植物には、前述のヨコハマダケやトウゴクミツバツツジのほか、牧野自身が採集したものでは、コガネシダやタマノカンアオイなどがあります。また、今では県内から失われた植物の標本も多く残されており、ホンバイラクサ(図5)やサデクサ(図6)、ハマウツボなどがあります。後者の標本は、その



図3. トウゴクミツバツツジ *Rhododendron wadanum* Makino(ツツジ科). 1914年に牧野が箱根で採集した基準標本とされる標本(MAK100772; 東京都立大学牧野標本館蔵)。

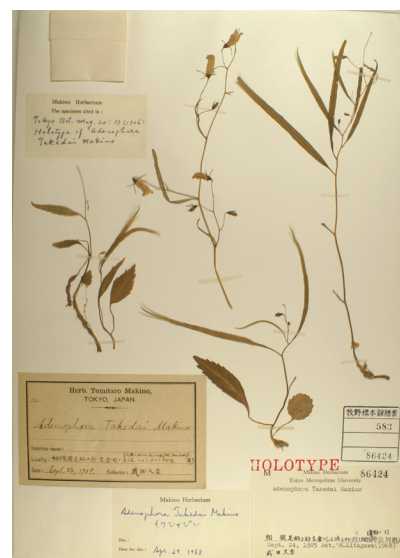


図4. イワシャジン *Adenophora takedae* Makino(キキョウ科). 1905年に玄倉川上流で武田久吉が採集した基準標本とされる標本(MAK86424; 東京都立大学牧野標本館蔵)。



図5. ホソパイラクサ *Urtica angustifolia* Fisch. ex Homem. (イラクサ科). 1920年に牧野が箱根で採集した標本. 神奈川県内では絶滅したと考えられる(MAK119389; 東京都立大学牧野標本館蔵).



図6. サデクサ *Persicaria maackiana* (Regel) Nakai (タデ科). 1905年に牧野が横浜で採集した標本. 神奈川県内では絶滅したと考えられる(MAK14985; 東京都立大学牧野標本館蔵).

後の自然環境の変化や各種開発などで、今の神奈川県内ではその姿を見ることはできない植物が、過去のそれぞれの時点、場所に、確かに存在していた証拠として重要なものです。このような標本を「自然の証拠」として、過去から未来に引き継ぎ、継承し続けることは、博物館の重要な使命の一つです。

連綿と引き継がれる標本

当館は、牧野の標本は所蔵していませんが、牧野と同時代の澤田武太郎のコレクションがあります。澤田は東京大学植物学教室に出入りし、横浜植物会で久内清孝と知り合い、同会の講師であった牧野を師と仰ぐようになりました(図7)。澤田の標本は、新聞紙の半紙大の台紙に貼付されており、通常の標本棚には収まらず、専用の標本棚に収納しています。この標本については、「牧野博士も舌を捲いて誉めていたほど」と記されています(本田, 1978)。

牧野や澤田より古い標本は、外国人により採集されたものが多く、大部分は本国の標本庫に保管されています。「らんまん」にも登場したツェンバリーやサヴァチェ、マキシモヴィッチの標本は、それぞれスウェーデンのウプサラ大学、フランスの国立自然史博物館、ロシアのコマロフ

植物研究所に所蔵されています。これらの標本は、それぞれに採集された時代、場所の貴重な資料として、今後も未来に引き継がれていきます。

神奈川県の植物相調査

神奈川県は、その植物相(ある地域に分布している植物の種類の全体像)が最もよく調べられている都道府県です。県全体の植物目録・植物誌として、1933年に刊行された『神奈川県植物目録』から、2018年に刊行された『神奈川県植物誌 2018』まで、6編もが刊行されている都道府県は他にありません。中でも、



図7. 牧野富太郎(左)と澤田武太郎(右)箱根山中(澤田秀三郎提供; 生命の星・地球博物館蔵)。

神奈川県植物誌調査会により1979年以来、調査が継続され、野外で植物を採集し、それを証拠標本とした分布図を掲載している『神奈川県植物誌1988・2001・2018』は、その調査方法とともに、高い評価を得ています。なお、神奈川県植物誌調査会による調査開始は、前出の横浜植物会の会員の有志の動きがきっかけでした(村上, 1979)。

しかし、このように詳しく植物相が解明されている基礎には二つの要因があったと考えられます。一つはツェンバリーやサヴァチェ、マキシモヴィッチらの外国人研究者が、神奈川県で植物標本を採集し、研究したことです。もう一つは日本の植物研究の主役を日本人が担うようになり、首都東京に近く、自然豊かな神奈川の地で、先述のような牧野や牧野が指導した地域の植物愛好家が活動したことです。

おわりに

この原稿を皆様が読まれる頃には、ドラマ「らんまん」も佳境を迎えているかと思います。「らんまん」の主人公は牧野をモデルにしているものの、フィクションであることは間違いありません。ですが、この1年間ほど、日本各地で牧野を題材にした展示会の開催が相次ぎ、各誌に関連記事が掲載されました。また、関連した書籍の刊行も引き続いていきます。また、これほどまで「植物採集」や「植物標本」「植物画」「植物学雑誌」の言葉が広く認識されたこともなかったように思います。今後は、この盛り上がりを一過性のものとするのではなく、牧野が情熱を注いだ「標本」を、未来に引き継ぐことを博物館の大切な使命とし、活動を行って行ければと思います。

最後に、貴重なお写真を提供いただいた三谷 創、澤田 秀三郎の各氏と横浜植物会、所蔵標本の撮影を許可いただき、使用させていただいた東京都立大学牧野標本館にお礼申し上げます。

参考文献

- 本田正次, 1978. 随想:私の自然 (2)箱根八里. 国立公園, (338): 12-13.
村上 司郎, 1979. “緑の紳士録”づくりー神奈川県植物誌調査会発足についてー. 横浜植物会年報, (8): 24.

より良い企画展を作るには？ ～展示を評価しながら考える

いしはま さ え こ
石浜 佐栄子(学芸員)

世界中の博物館等施設で数多の企画展示が日々新たに生み出されていますが、その展示制作までのプロセスは、内容や目的、予算規模等によって実に様々です。当館は特別展や企画展にかけられる予算が限られていることもあり、学芸員自身が学術的な内容に関するのみならず、企画立案、展示物のデザイン、印刷物の編集、展示台の工作からラベル製作まで、ボランティアさんたちの助けも借りながら、ほぼ手作りで展示を作り上げています。

ここでは次回の企画展を例に、当館では展示をどのように企画し、どのように練り上げているのか、その裏側を少しご紹介したいと思います。

展示室入場者の傾向を読み解く

博物館には、どのような人が訪れているのでしょうか。展示を企画するにあたり、その展示を見に来てほしい人、すなわちターゲット層を設定しますが、その第一歩として、普段の来館者層を知っておくことは欠かせません。

当館の2022年度の常設展示室への入場者の内訳は図1の通りです。小学生以下(園児+小学生)の入場者が約35%を占めます。ここ20年ほど、小学生以下の入場者は成人の入場者(全体の25～35%程度)を上回る傾向にありました。そのため我々学芸員は子ども向け展示の重要性を認識し、特別展での子ども向け体験コーナーの設置など様々な

試行をしてきました。

ところが2014年度あたりから小学生の入場者数は減り、むしろ「園児(3～6歳の未就学児)」の存在感が増してきていることが分かりました(図2)。開館当時は入場者の6～7%程度しかいなかった園児がじわじわと増加し、割合のみならず実際の人数としても増えています。

さらに当館の場合、3歳未満の来館者には観覧券を発券しないため、0～2歳は統計の対象外となります。2022年度の場合、「園児」は3～6歳の3.5学年(年少の1つ下の学年で3歳になった児+年少+年中+年長)分で入場者の13.6%です。つまり1学年あたりで見た園児の利用は、小学生と同等か、それ以上に多くなっているのです。

小学生の場合、その半数程度が学校等による団体利用ですが、園児の場合は多くが家族など個人単位での利用です。つまり近年利用が増えているのは「幼児を含む家族連れ(以下、“親子連れ”）」だと推定することができます。週末に展示室を巡回していると、2歳以下と思われる乳幼児を連れた親子連れも多く、統計が示す数字以上に展示室を利用する未就学児の数が増えていることを感じます。

“親子連れ”の来館が増えているのは当館だけではなく、近年、多くの自然史系博物館や科学館で同様の傾向があるようです。子どもが小さな頃から博物館

等に連れてくる教育熱心な保護者の方が増えているのか、幼児連れで出かけられる場所が減っているのか、小学生も高学年になると家族で博物館には来なくなってしまうのか…理由は気になるところですが、ともあれ近年の当館の展示室は、この少子化の世の中にもかかわらず、“親子連れ”を抜きには語れなくなっているのが現状です。

幼児も保護者も楽しめる展示の企画を

このような現状を受け、幼児にも保護者にも楽しんでもらえるような展示のあり方について、2020年度から加藤学芸員・大坪学芸員・広谷名誉館員らとともに研究助成を受けて検討を重ねてきました(JSPS 科研費20K01132)。クイズやポップ解説など、展示に「ちょい足し」する親子向け企画はこれまでも実施してきたのですが、一度それなりの広いスペースを使って親子連れをターゲットとした展示を作れないかなあと考えていたところ、2023年度の企画展の一部として実践してみても？という声があり、早速、昨年の秋頃から具体的な展示内容の検討を始めました。

企画展「動物たちのくらし～^{やぶうちまさゆき}藪内正幸が描いた生態画の世界～(仮)」は、動物生態画家として著名な藪内正幸氏のイラストを当館収蔵の^{はくせい}剥製や写真等とともに展示し、動物たちのくらしぶりを伝えるとともに、動物生態画の重要性や魅力などを紹介する展示です(2024/2/23～5/12開催予定)。図鑑などに掲載された生態画の原画をじっくり見てもらえると、主なターゲットは大人ということになりそうですが、藪内氏は絵本や児童書の挿絵の仕事も多く手がけています。そこで本企画展では、大人向けコーナーと親子連れ向けコーナーを設け、展示室を二分した展示構成にチャレンジしてみることにしました。もちろん、全体の構成として誰にでも楽しめる工夫を凝らすことは大前提です。

親子連れ向けコーナーでは「絵本に出てくる生態画と剥製を通して、動物たちの生態をやさしく伝え、親子で対話

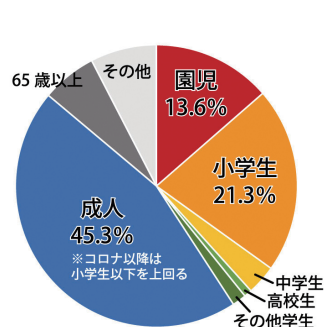


図1. 当館の常設展示室の入場者(2022年度, 計224,862人)の属性の内訳。発券を元とした統計のため、0～2歳の入場者や無料エリアのみ利用者は含まない。

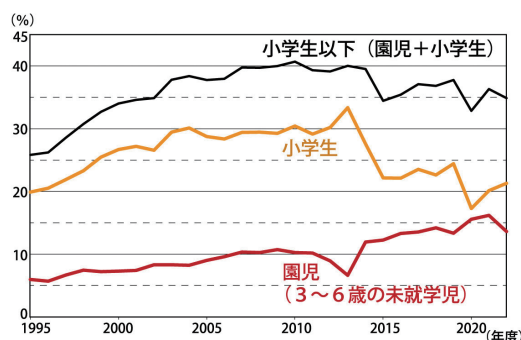


図2. 「園児」と「小学生」、それらを合わせた「小学生以下」の入場者の割合の年度変化(1995～2022年度, 当館年報データに基づく)。新型コロナウイルス感染症が流行した2020～2022年度は、成人の割合が増えて子どもの割合が減り、小学生以下の入場者割合を成人が上回った。

をしながら動物に親しみをもってもらおう」ということを目標に掲げました。せっかく博物館で展示をするのだから、生態画と剥製を並べて展示したい！というのが我々学芸員が考えた基本コンセプト。その方向性で展示内容を議論していたのですが…その中で出てきたのが「幼児は剥製を『死』に近いものとして怖がるのでは？」という意見でした。

確かにそうかもしれません。もしかしたら幼児には、実物の剥製よりも、伝えたい情報を詰め込んで作った「ぬいぐるみ」を展示した方が良いのだろうか？ちょっと考え込んでしまった私は、来館者の生の声を聞いてみよう！と思い立ちました。

展示を形成しながら「評価」する

来館者の理解度や満足度の高い展示を作るためには、展示の「評価（エバリュエーション）」を行い、その結果をふまえて企画を再検討したり、修正や改善を行ったりすることが有効です。「評価」といっても、入場者の人数とか、入館料収入の金額とか、出口調査で〇〇%の人が「満足」と答えたから展示は成功…とかいうことではありません。学芸員の意図が無理なく伝わり、来館者も満足できる、そんな展示を作るために来館者の声を聞き取り改善に生かすのが、展示の「評価」です。

展示の評価には、企画段階に行う「事前評価」、展示を形成する途中で行う「形成的評価」、展示完成後に行う「総括的評価」があります。今回実施したのは試作展示を作り、それを見た人の反応を探る「形成的評価」です。「剥製の展示は親子連れに受け入れられるのか？」という問いを立て、「①剥製＋生態画」と「②ぬいぐるみ＋生態画」という2つの試作展示を作り、それらに対する印象や好みを回答してもらって展示の方向性を確認することにしました。当館で実施する企画展だから、実際に当館に足を運んでくれた人に意見を聞くのが妥当だろうということで、開館記念イベント「ミューズ・フェスタ2023」（2023/3/11-12）にて試作展示を前にアンケート調査を実施したところ（図3）、2日間で202枚の回答を得ることができました。



図3. 試作展示（上）と形成的評価の実施の様子（下）（ミューズ・フェスタ2023）。

回答を分析した結果、約2/3の人が「①剥製＋生態画」、約1/3の人が「②ぬいぐるみ＋生態画」の展示を好むことが分かりました。この割合は、親子連れでも成人でもそれ以外でも、回答者の属性に関わらず、ほぼ一定であることも分かりました（図4）。つまり、親子連れが成人よりもぬいぐるみ展示を好むわけではない。これは意外な結果でした。確かに何件か、乳幼児を連れの方から「幼い子どもに剥製は怖い」という意見も寄せられたのですが、それ以上に「博物館では子どもに本物を見せたい」とする保護者が多数派だったのです。

ということで、我々が確かめたかった「剥製の展示は親子連れにも受け入れられるのか？」という問いに対する答えは「Yes」。実物の標本を見たいという声、博物館らしい展示を求める声を受け、今回は剥製と生態画を並べるという当初のコンセプトのまま準備を進めることに決定しました。しかし一方で、実際に来館した人の1/3は「②ぬいぐるみ＋生態画の展示」を嗜好したことも事実です。これらの来館者を排除しないような展示を検討する必要もありそうです。

なおアンケートでは「企画展ではどんな展示が見たいですか？」についても、複数選択可で聞いてみました。最も多かったのは『生き物の勉強になる展示』という回答で54%。この設問の回答分析で興味深かったのは、属性（親子

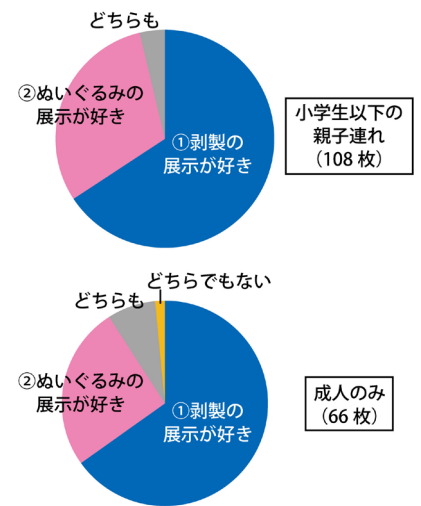


図4. 「①剥製＋生態画の展示」と「②ぬいぐるみ＋生態画の展示」どちらが好きですか？という問いに対する回答（全202枚に対する割合）。小学生以下の親子連れでも、成人のみでも、どちらも回答の割合はあまり変わらなかった。

連れか成人か）以上に、「①剥製派」か「②ぬいぐるみ派」かによって回答の傾向が分かれたことです。「①剥製＋生態画の展示」を好んだ人は、親子連れであれ成人であれ『生き物の勉強になる展示』を嗜好。一方「②ぬいぐるみ＋生態画の展示」を好んだ人は、『低い位置にある展示』『親子で楽しめる展示』に重きを置く傾向があることが分かりました。そして『一緒に記念撮影できる展示』を最も嗜好したのは、親子連れではなく「②ぬいぐるみ派」の成人でした。どんな展示を見たいかは、その人が博物館に何を求めているかによって回答が異なるのだなあと考えさせられる結果でした。

評価の先の、より良い展示へ

ミューズ・フェスタ2023における多くの皆様のご協力のおかげで、展示の形成的評価を行い、企画展の方向性を確認することができました。その後も試作展示を作っては関係者に見てもらって感想を聞くなど、展示内容を最終決定するための準備作業を続けています。

やるべきことはまだ盛り沢山ですが、学芸員の展示意図を上手に伝え、かつ皆さんに楽しんでいただける展示になるよう、企画展チーム一同頑張っていきたいと思っています。まだ少し先ですが、来春の企画展、ぜひ見に来てください！

ロンドン研究日記

まつもと りょうこ
松本 涼子(学芸員)

はじめに

2023年4月20日から1年間、英国のUniversity College London(ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン; 以下、UCL)で研究活動を行うため、長期出張に出ています。ここでは、その経緯と研究の様子をお伝えしたいと思います。

日本の研究者が研究資金を得る方法の一つが、独立行政法人 日本学術振興会への研究費の申請です。文部科学省所管の学術振興会は、毎年公募を出し、研究資金の援助を行っています。ここで交付される研究助成金が「科研費」と呼ばれるものです。科研費には色々な種類がありますが、今回獲得したのは、採択された研究者が海外の大学などの研究機関で1年程度の期間に国際共同研究を行うためのものです。この申請が採択されたのは2018年度のことでした。採択後3年以内に渡航する決まりのため、2020年4月上旬に渡航を予定していましたが、新型コロナウイルスの流行により渡航中止となりました。非常事態に伴い研究期間の延長が認められ、渡航規制が緩和された今年度、ようやく実現することができました。滞在先のUCLは、私が学位を取得した大学であり、とても馴染みが深い場所でもあります(図1)。

University College London(UCL)はどんな大学?

University College LondonとUniversity of Londonの違いを問われることが度々あります。UCLは、University of London設立の大元になった大学です。UCLの設立後、ロンドン市内にキングズ・カレッジなど多数のカレッジが誕生しました。これ



図1. UCLのメインキャンパス。

らの総称がUniversity of Londonとなります。UCLもUniversity of Londonの中に含まれ、どちらもロンドン大学と訳されることが多いのですが、混乱を避けるため、ここではUCLと表記します。UCLの設立は1826年に遡ります。大学設立の際、その理念に大きな影響を与えたのが哲学者のジェレミー・ベンサムでした。当時は既に、オックスフォード大学とケンブリッジ大学があったものの、英国教徒の貴族男性のみ入学が許可されており、誰でも教育を受けられる場所ではありませんでした。ベンサムは「教育の機会は平等に与えられるべきである」と唱え、その理念に基づき人種・階級・宗教を問わず、誰でも教育を受けることができるUCL(当時はLondon University)が設立されました。しかし、当時の「教育の平等」とは男性に限られたことであり、女性の入学は許されていませんでした。1860年代になると女性の入学が許可され、1878年には英国で初めて女性の学位取得が認められるようになりました。

教育の平等は留学生も例外ではありません。江戸時代末期の1863年、長州藩主の密命を受けた5人の若者(井上馨、井上勝、遠藤謹助、山尾庸三、伊藤博文)が英国を訪れ、人種・宗教の制限なく広く門戸を開いたUCLに聴講生として入学しました。さらに、1865年には、薩摩藩からも14名の若者がUCLに入学しています。その中の一人が、後に東京帝室博物館(現・東京国立博物館)の初代館長に就任した町田久成です。UCLの中庭には、彼らの名が刻まれた顕彰碑があります。

教育の平等化を実現した偉大なジェレミー・ベンサムに現在もお目にかかることができます。ベンサムの死後、遺言により遺体はUCLで医学研究のために解剖された後、ミイラのような状態で保存され、UCLの一角に鎮座することになりました。しかし、あまりに長いこと座り続けてきたため、頭部が落ちてしまい、ゴムマスクが被せられています(図2)。現在のUCLには、様々な人種・宗教の学生や職員が集まっています。その様子にベンサムも



図2. UCLのキャンパス内に飾られたジェレミー・ベンサム。

満足しているかもしれません。

大学施設と博物館

UCLはロンドンの中心部に位置するため、キャンパスはコンパクトにまとまっており、一部の施設は街中に分散しています。メインキャンパスは大英博物館の裏口から徒歩5分ほどの場所にあり、ここには講義室や研究室の他、図書館、学食、造形工房、シアター、ジムなどの施設が集まっています。博物館は3つあり、ピートリー博物館(考古)、グラント博物館(生物)、アート博物館(美術)がメインキャンパス内に点在しています。ここで特にご紹介したいのがグラント博物館です。

グラント博物館は1827年、ロバート・エドモンド・グラントによって教材用の標本を管理するために設立されました。グラントは、エディンバラ大学で教鞭をとっていた時代、若きチャールズ・ダーウィンに大きな影響を与えた師としても知られています。UCLへ移籍したグラントは、英国初の動物学及び比較解剖学の教授に着任しました。しかし、当時の大学に教材用の標本が一点もないことを知り、すぐに骨格・液浸・ワックス標本の収集を始めます。彼の死後、書籍や1万点の標本は博物館に寄贈され、現在の博物館コレクションの基盤となりました。ドードー、フクロオオカミなど世界的にも非常に珍しい標本も数多く収蔵されているグラント博物



図3. UCLのグラント博物館。改装中のため現在閉館中。

館は、1996年になると一般公開されるようになります。2011年には、通りを挟んだ向かい側の建物に博物館が移設され、展示室を拡大してリニューアルオープンしました(図3)。展示室内に学習スペースもあり、大学の授業、研究、一般の来館者など多くの人に利用されています。長い博物館の歴史の中で、分子生物学などの新しい学問の発展に伴い、古い自然史標本の利用価値が問われた時代もありました。しかし、どんなに科学が進歩しようとも自然史標本には普遍的価値があることが再認識され、グラントの標本は200年近く学内外の人々に活用されています。この先も多くの人が彼の集めた標本を手に取り、学び、新しい発見をしていくことでしょう。

UCLでの研究課題

現在、在籍しているのはUCLのメインキャンパス内のスーザン・エバンス教授の研究室です(図4)。世界的にも有名な両生爬虫類の研究者で、大学院生時代の指導教官の一人です。今回UCLとの共同研究では、絶滅したアルバノペトン類



図4. UCLのエバンス研究室。

という両生類を題材にしています。現生両生類の起源には多くの謎が残されていますが、アルバノペトン類は現生両生類の系統に近く、その進化の道筋を紐解く上でも重要なグループであると考えられています。しかし、化石記録が少なく、その生態は謎に包まれていました。ところが近年、スペイン、日本、ミャンマーから新たに発見された化石から、その興味深い特徴が徐々に明らかになってきました。獲物を捕らえる際に長く飛び出す舌や、爬虫類のように鱗に覆われた体は、陸上生活に適応していることを示しています。また、アルバノペトン類は首の関節が発達して、よく動くのに対して、現生両生類では首の動く方向が限られています。進化の過程で首の動きが制限されるようになったとすれば、そこに何か利点があったのでしょうか。この疑問に挑むため、絶滅したアルバノペトン類の生態を復元し、両生類の進化の一端を解き明かそうとしています。

ロンドン自然史博物館

研究には化石と現生の両生類を観察する必要があるため、ロンドン自然史博物館にも通っています。同じ研究室出身のマーク・ジョーンズ博士が同博物館のコレクション担当であるため、共同でデータ収集を行っています(図5)。

UCLでは国内外の研究者による研究発表を聞く機会に恵まれています。ロンドン自然史博物館でもセミナーが開催されているため、時々そちらにも参加させてもらっています。博物館の小規模セミナーはティールーム横の会議室に20人ほどの職員と学生が集まり、コーヒーとビスケットを片手に、気楽に議論するスタイルです。ティールームの壁には職員が近年発表した論文がびっしりと貼られており、活発な研究活動の様子を窺い知ることができます(図6)。

ロンドン自然史博物館は、図書館が充実し、CTなどの研究機材が整っている素晴らしい博物館です(図7)。しかし、欠点がないわけではありません。例えば、標本カタログが不完全であることが多々あります。液浸標本は瓶が古く、容易に標本を取り出せないものが多く、膨大な書類手続きを必要とするため、標本の貸し出し



図5. ロンドン自然史博物館の現生両生類のコレクション。ジョーンズ博士と標本を選出中。



図6. ロンドン自然史博物館の動物部門のティールーム。壁には職員の論文が張り出されている。



図7. ロンドン自然史博物館の現生魚類・両生爬虫類の図書室。他にも多くの図書室がある。

も容易ではなく、標本の利便性が低いのも問題です。各博物館の長所と短所を目の当たりにし、標本管理について考える機会が多々あります。この経験を自身の標本管理にどう活かすかも課題です。

おわりに

長期間、館を不在するにあたり、職員、ボランティアの皆さんなど、多くの方々に助けて頂き深く感謝しております。英国での貴重な日々を大切に過ごし、帰国後の仕事に活かしていきたいと思います。

催し物のご案内

特別展「かながわご当地菌類展」

2023年7月15日(土)～11月5日(日) 9:00～16:30(入館は16:00まで)

休館日: 9月4日(月)・11日(月)・12日(火)・19日(火)・25日(月)

10月2日(月)・10日(火)・11日(水)・16日(月)・23日(月)・30日(月)

きのこ、カビなどの菌類は、身近でありながら謎に満ちた存在です。本特別展では、神奈川県やその周辺から新種発表された菌類のほか、絶滅のおそれのあるレアな菌類、県内でなじみ深いきのこなど、これまでの研究成果から、かながわらしい「ご当地菌類」を多数ご紹介します。展示のラストには、「みんなで選ぼう! かながわご当地菌類投票」コーナーもありますのでお楽しみに!



《 事前申し込みの講座 》

詳細は、博物館ウェブサイトや催物案内をご覧ください。

- 植物図鑑の使い方～樹木編～[博物館]
日時/10月14日(土) 10:00～15:00
対象/小学4年生～成人・教員 20人
※小学生は保護者参加必須、
その場合は幼児連れ可。
申込締切:10月3日(火)
- 本日は怖いアメリカザリガニ
～最悪の水辺の外來種について勉強しよう～[川崎市]
日時/10月15日(日) 9:30～14:00 ※雨天中止
対象/小学生～成人 20人
※小学生は保護者参加必須
申込締切:10月3日(火)
- 先生のための地層と化石入門 ハマの地形編
[1日目:博物館、2日目:横浜市]
日時/10月21日(土)・22日(日) 10:00～16:00
※2日間の参加が条件です。
対象/教員 8人
申込締切:9月19日(火)
- あなたのパソコンで地形を見る(一般向け)[博物館]
日時/10月22日(日) 10:00～15:00
対象/小学4年生～成人 6人
申込締切:10月10日(火)
- 地質や地形を観察してみよう[二宮町]
日時/10月28日(土) 10:00～15:00 ※雨天中止
対象/小学4年～6年生とその保護者 20人
※保護者参加必須
申込締切:10月17日(火)
- はっぱであそぼう[博物館]
日時/11月12日(日) 10:30～11:30
対象/5～6歳の子どもの保護者 8組24人
※保護者参加必須
申込締切:10月31日(火)
- 貝殻のふしぎを調べよう
①ホタテ[小田原市] ②アサリ[横浜市] ③巻貝[横浜市]
①日 時/11月19日(日) 10:00～15:30
申込締切/11月7日(火)
②日 時/11月26日(日) 10:00～15:30
申込締切/11月14日(火)
③日 時/12月3日(日) 10:00～15:30
申込締切/11月21日(火)
※室内講座です。また、連続講座ではありません。
対象/小学4年生～成人 18人
※小学生は保護者参加必須
- 秋の地形地質観察会[大磯町]
日時/11月23日(木・祝) 10:00～15:00
※雨天中止
対象/中学生～成人 25人
申込締切:11月7日(火)
- 初めてのシダ～シダ植物の観察ポイント～[博物館]
日時/12月10日(日) 13:30～15:30
対象/中学生～成人 6人
申込締切:11月28日(火)

【催し物への参加申込について】

講座名・開催日・代表者の住所・電話番号・申込者全員の氏名・年齢(学年)を明記の上、往復はがきにて当館住所まで郵送、またはウェブサイトからお申込ください。応募者多数の場合は抽選となります。抽選で落選した方に対し、キャンセル待ちの対応を行いません。ご希望の方は、お申込時に、その旨をご記入ください。参加費は無料ですが、講座により傷害保険(1日50円/1人)への加入をお願いすることがあります。

催し物の詳細や最新の情報は、当館ウェブサイト、および公式X(旧・Twitter)でご確認ください。

【公式ウェブサイト】<https://nh.kanagawa-museum.jp/>
【公式 X】@seimeinohoshiPR 【混雑情報 X】@seimeinohoshiCI
【問い合わせ先】企画情報部 企画普及課 TEL: 0465-21-1515

生命の星



ライブラリー通信 同名異本② 野草の自然史

つちや さだお
土屋 定夫(司書)

1冊の本との出会いが、自分を思ってもいなかった行動に走らせることがあるものです。

ある女性が長田武正 著『野草の自然史 植物分類へのみちしるべ』という本を1997年に個人出版しました。この女性は古書店で入手した、1979年に講談社から出版されていた同名の本にとても感動し、さらに同書が絶版であることを惜しみ、著者の快諾を受けて、一部分を省略した抄本として復刊しました。

個人出版にはかなりの労力が必要ですが、感動した気持ちが勝ったのでしょうか。著者の長田武正(1912-2002)は『日本イネ科植物図譜』(平凡社)や『検索入門野草図鑑』(保育社)などの著書がある植物分類学専攻の学者です。後に、講談社は絶版だった単行本の『野草の自然史』を新たにブルーバックスの1冊として、内容はそのままに『小事典・野草の手帖 植物分類への道しるべ』と書名を変えて出版しました。

これは女性の熱意の賜物と言えたらよかったのですが、この1冊が世に出たのは1989年のことで個人出版よりも8年ほど前に遡ってしまいます。書名が異なっていたためか、気付かなかったのかもしれませんが。

ただ、個人出版を許可した際に長田氏はブルーバックスのことは伝えなかったのでしょうか? 意外と出版に関する謎はあるものですね。

今回は同名異本ではなく、異名同本というべきでしょうか。



ブルーバックス 1989年



個人出版本 1997年

自然科学のとびら
第29巻3号(通巻112号)
2023年9月15日発行
発行者 神奈川県立生命の星・地球博物館
館長 田中 徳久
〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499
TEL: 0465-21-1515 FAX: 0465-23-8846
編集 本杉 弥生(企画普及課)
印刷 株式会社あしがら印刷

© 2023 by the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History.